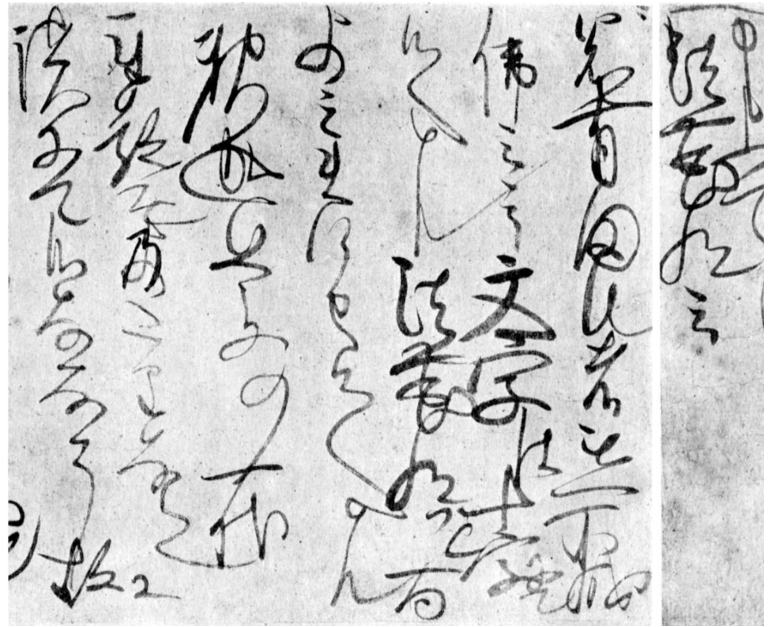




今月の御聖訓



法華經ニ云ク、

(若し法を聞くこと有らん者は一りとして成仏せずといふこと無けん)
若シ有^レ聞^レコト 法者無^三ケン^一 リトシテ 不^ニ成^一

仏ニ云云。文字は十字にて

候へども(↑ん)法華經を一句

よみまいらせ候へども(↑も)、

釈迦如来の一代

聖教をのこりなく

読^ムにて候なるぞ。【故に】

【千日尼御返事 全集一三一八頁】

目 次

今月の御聖訓

卷頭言	菅野憲道	1
【講義】「今この時が、仏道修行の時」	菅野憲道	2
「興風談所の研究成果(十)」	菅原関道	8
【採過拾新録】「中村仲蔵と山中平九郎」		12
【山行記】「白峰三山縦走記」	森 秀之	16
読書案内『論語と算盤』	松田銘道	18
【題詞】		20

九月の行事 長月詠草 恵日俳壇

巻頭言

死者との交感

菅野 憲道



今年のお盆は長雨とコロナ禍で静かな明け暮れだった。

回向帳や過去帳を繰りながら、目にする諡号に、ああこの人もあの世の住人か、ああこの人は頑張ってくれてありがとう、この人は残念だったなどと由なき想いが湧き、時には片言ながら声なき声も聞こえた気がして、お題目にこそ死者との交感があると自然に信じて唱題する。

ところでキリスト教でも、イスラム教でも、死者を供養するという概念はない。仏教だけが、死者を後々まで追善供養するという教義や儀式を有しているという。

キリスト教の教えでは、人は神を信ずる者が亡くなれば天国に召され、異教徒や不信の者は地獄に落ちて永遠に浮かぶ瀬はない。たとえ親子兄弟でも、一度地獄行が決まればどうすることも出来ない。これでは幼い子を亡くした母親など、とても癒やされるものではない。

仏教が優れた教えであることは、因明、唯識から始まって五蘊十二入などで示された生命観や実相観などいろいろあるが、三世両重の十二因縁で明かされた現世と来世という見方もその一つといえる。

現代人は無宗教で物質主義に陥り易いから「人は死んだら無になる」と考える。そこから不安や虚無が生じて、一時的には拝金主義や快樂主義に逃避して考えないようにしても、ついに死から脱れることは出来ない。しかし一度仏法を学べば、あらゆるものが自立した固有の実体はなく、あらゆるものが相互に関係し合う現象としての姿であると云う事が了解できる。因縁果報というあり方こそ真実の相であると信ずれば、幽明境を異にする精霊とも、時空を越えた妙法の因縁という絆で結ばれていることが感じられる。お題目を信ずれば随分と未来は明るいものとなるはずだ。

お講講話(要旨)

拝読御書

「千日尼御返事」(全集一三二八頁)

今この時が、 仏道修行の時

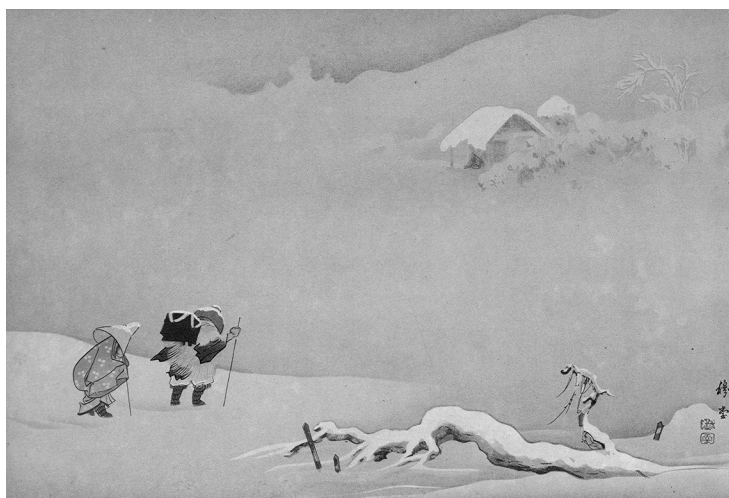
菅野憲道

《お題目にすべてが含まれる》

本書は、千日尼、すなわち故阿仏房の後家尼に対し、弘安三年七月に宛てられた御書です。

この前年三月に阿仏房が亡くなられて、その子息藤九郎が百カ日の納骨を期して首にお骨を掛けて、身延山中の大聖人のもとにお詣りされたのですが、その翌年七月にも藤九郎が再び供養の品々を携えてお参りされました。その時に托されたご消息文で今でも阿仏房妙宣寺に全文が残っております。

その中で、寡婦となった千日尼の^{うれ}愁いを感じられてか、冒頭に法華經に帰依された故阿仏房が、確実に成仏の果報を得られたであろう事の、絶対的な保証として次下の經文を示されるのでした。



阿仏房・千日尼夫妻の佐渡でのお給仕

「若有聞法者無一不成仏(若し法を聞くこと有らん者は一^{ひと}として成仏せずということ無けん)」(全集一三二八頁)

集一三二八頁)

この法華經方便品の文は、經文はわずか一句十字ばかりであるけれども、法華經の一句の中には一切經の功德がすべて納っており、妙樂大師も云われているように、法華經を一字一句でも読んだならば釈尊一代の經々を一字も落とさずに読んだことになります。それほど法華經は唯一無二にして最尊のお經なのです。

例えば日本という二文字の中に、日本の国の地理、社会、政治、経済、歴史、文化、教育、その他あらゆることがその中に収まってしまう。それはインドでも、中国でも、アメリカでも、みな同じことです。その名の中にあらゆるものが納ってしまうもので

す。

また、たとえば鏡は顔面の微細な部分を写すかと思えば、広大な自然界の光景を映し出すことができます。鏡面の大きさは関係なく、その使い方によって微少な物から極大の世界まで同じ鏡面に映すことができるのです。同じように妙法蓮華經の名の中に森羅万象の法界全体が納っており、一念三千の理法を具現した妙法蓮華經がある。

つまり、我われも己心中にお題目を持った時には、そのお題目の力によって、我が一念が法界全体と一体となっていることを説かれているのです。

最近では、IT技術が急速に発達して、特に演算装置や記憶装置がすごい勢いで発達していて、小さなSDカードとかUSBメモリの中には、小さな図書館の本全部が入るくらいの容量のものが千数百円で買えるような時代になっています。

演算装置でもAI（人口知能）が普及しだして、乗用車や家電、などに組み込まれはじめております。

しかし考えてみるとこれらの技術も人間の脳の働きを真似したようなもので、人間の脳や身体のシステムこそもっとも優れていて、ソフトの面からいえば無限の発展性もあるんだと思います。

またNHKなどで人体の不思議など、生命科学の最新の知見をわかりやすく解説してくれる特番があり、私もよく見ます。身体の仕組み、遺伝子の働き、各臓器の特性など、新発見の情報に驚かされることがあります。

しかし癌や各種の難病の解明が未だ進んでいないように、人

体の不思議を説明するにはまだまだ遠いというような印象も受けます。何よりも精妙にできた人体を思うと、血液や、筋肉や神経等の生成はどういう力が働いて生まれたのか？、巨大ネットワークのようにさまざまな部位が整然と関連づけられて作用するのはどこから始まったか？、大脳のような記憶や思考する装置は、何がもたらしたのか？と不思議に思うのです。決して我われ人間が一から作れるものではなくて、自然界の中から高度に進化した一部の生命体の中に、そういう生命装置が自然発生的に出来てきたのであって、そのこと自体が不思議な大自然の力だということを、宗教心があるうとなかろうと生命を支配する根源的な力が働いていることを感じざるを得ないのです。

自我意識や人智を持つて作り上げる理論以前に、我が身にも何か圧倒的な妙法の力が働いて生命現象が展開していることに気づかなければならないと思います。

しかも同じ人間とはいえ、
「九界・六道の一切衆生各々心々かわれり。譬へば二人・三人乃至百千人候へども、一尺の面かおの内じち（実）ににたる人一人もなし。心のにざるゆへに面にもにず」（全集一三一九頁）

と仰せのように、その心はそれぞれに違います。心が違うように顔つきも違います。最近では顔認証という識別法が普及してきましたが、これも人類がどれだけ大勢いても指紋が異なるように顔が違っているからできることです。

顔が違っているのは心も違っているからで、好き嫌いやものの見方、考え方も違っている、感情的なことも違っている、楽しみや苦しみ感じ方も違っております。それを、

「されば花をあい(愛)し、月をあいし、すき(酸)をこのみ、にがきをこのみ、ちいさきをあいし、大なるをあいし、いろいろなり。善をこのみ、悪をこのみ、しなじななり」(同)

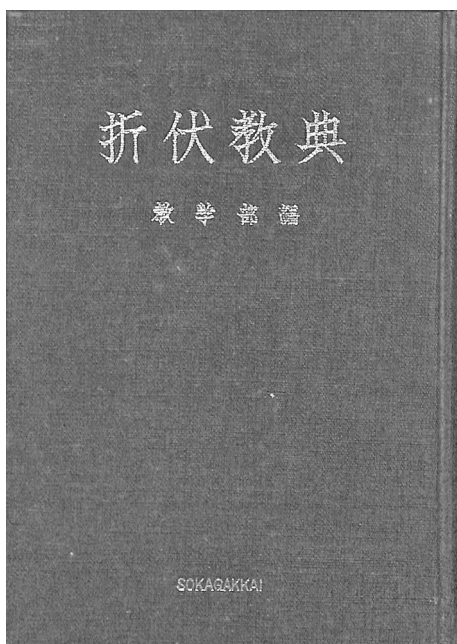
といわれ、人は持つて生まれた性質や幼少期の環境、あるいはさまざまな人間関係などの因縁は千差万別であることを説かれます。確かに幼児でも皆んなと遊ぶのが好きな子もいれば、一人遊びが楽しい子もいる。恥ずかしがり屋もいれば、目立ちたがり屋もあります。静かな子もいれば賑やかでじつとしていられない子もおります。一人一人違うのです。しかし、

「かくのごとくいろいろに候へども、法華經に入りぬれば唯一人の身、一人の心なり。」(同)

人は因縁果報が違うから千差万別であるけれども、法華經という真理の大海に入ってしまうと、ちょうど海水が同一の鹹味であるように、すべての人々が妙法蓮華經の当体であることが明かされます。

《真の豊かな世界》

ところが成仏という概念は、功德と罰を強調してご利益信仰にこり固まっている人達の理解では、いわゆる名聞名利の延長線上にあって、事業で成功して一財産築いたり、出世競争に勝ち残って社会的に高い地位に昇ったりすることに心を奪われ、



教団組織内に於いても、役職や財力、政治力などが幅を利かせます。挙げ句に、その仏界のイメージが、どうも成功した実業家のイメージで捉えている人が多いようなのです。

かつては創価学会のバイブル視された『折伏教典』の中に、十界論を解説した次のような一節があります。

「……そして同じ人間の中にもこの十界がそなわって居る。地獄界Ⅱ不具者、病者、狂人、ルンペン、邪宗教の坊主及び

信者

かつての学会のバイブル『折伏教典』
餓鬼界Ⅱ下級労働者、衣服住居等まではとても手が廻らず毎日毎日の生活が食を得る爲に働いて居るといつ様な人々。アルコール中毒になつて酒が無ければ生きて行かれぬといった人間、金をもうける爲には手段を選ばぬという拝金主義者、其他何んでも目についたものが欲しくてならぬという様な性格異状者。

畜生界Ⅱパンパン、不良、泥棒、スリ、其他犯罪者、自分より強い者には絶対に従順で自分より弱い者にはいばるといふ人格の低級な人間。

修羅界Ⅱ競輪競馬バクチ等を事として居る人間、兵隊、警官、拳闘家、将棋、碁を職業とする人の様に常に人と争う人間。

人間界Ⅱ普通平凡に生活して居る市井人

天 界Ⅱ大金持、元の皇族、貴族、一國を動かして居る大政治家、経済家、偉大な軍人等々。

聲聞界Ⅱ學生、研究者、学者等。

緣覚界Ⅱ大作曲家、音楽家、芸能上で一芸の奥義に達した者、何かの研究を完成し学者等。

菩薩界Ⅱ二宮尊徳等の如く廣く社会を利益した者。偉大な發明發見等に依り廣く社会を利益した者(例えば電燈を作ったエジソン、蒸汽機関を作ったワット、ノーベル賞を授與された湯川秀樹博士、支那に生れた孔子等) さらにすぐれた菩薩界は正しい佛法を廣め、衆生にすくいを与えた人々。

佛 界Ⅱ日蓮大聖人(御本佛)釋尊(迹佛)天台(迹佛)傳教大師(迹仏)等。」

さすがにこれは後に改訂されてはいるが、それにしても地獄界の解説などひどすぎるのではないでしょうか。

日蓮大聖人の教えにおいて、地獄界とか仏界とは、

「夫れ浄土と云ふも地獄と云ふも外には候はず。ただ我等がむねの間にあり。」(「上野殿後家尼御返事」)

「又衆生の心けがるれば土もけがれ、心清ければ土も清しとて、浄土と云ひ穢土と云ふも土に二つの隔てなし。只我等が心の善悪によると見えたり。」(「一生成仏抄」)

「抑^{そもそも}地獄と仏とはいづれの所に候ぞとたづね候へば、或は地の下と申す経もあり、或は西方等と申す経も候。しかれども委細にたづね候へば我等が五尺の身の内に候とみて候。さもやをばへ候事は、我等が心の内に父をあなづり母ををろかにする人は、地獄其の人の心の内に候。」(「重須殿女房御返事」)

とあつて、十界論もすべて事一念三千論の上から凡夫の一念心

の上において論じられるものでしょう。

しかし『折伏教典』は改訂しても、創価学会のご利益信仰Ⅱそれは貪欲や餓鬼道に通ずる煩惱を増長しかねないⅡや功利的な価値論は一貫しており、創価新報などに見られる傲慢で俗悪な体質として今に至っております。

彼等にかかれば貧道や病いの者は仏道からはほど遠い三惡道の衆生とされ、御書の教えとは全く違うものです。

しかも生老病死は人の常、盛者必衰は世の習いですから、寿命、財宝、地位、いずれも眞の頼みにはならないものです。

世間相を見ても、社会的に成功したはずの人生が得意絶頂から一遍に転落するような例は枚挙に暇がありません。多くの財を手に入れたばかりに不幸になった話しや、器量以上の地位について破滅した例も限りがありません、世間的に功名をとげた政財界の大物などといっても、内実は厳しい生存競争の中で疑心暗鬼の修羅道や餓鬼道となり、心安まる暇もないのではというらぬ同情を覚えたりします。

十界互具とは、仏界の中にも地獄界があるし、地獄界の中にも仏界があるということです。

ですから、いのちの根源のところ、この妙法という成仏の法、すなわち何のために生きるかという人生の指標となる妙法がなければ、羅針盤を失った船のように、目標を見失い、自己の位置を忘れ、航路を迷走してしまうようなものです。人生の航路を全うしたければ必ず生死解脱の道を明かされた妙法を求めて、一念に受持しなければなりません。法華經に説かれる「衣裏珠の譬え」や「髻中明珠の譬え」とは、この妙法蓮華經

こそが無上宝珠であることを示しているのです。

ですから、この信心をしてわずかの現世利益をいただくことが目的ではなく、大聖人より妙法蓮華經の宝珠を頂いて一生信受することが目的なのです。この一番根本の成仏道が信じられなければ、迷いのまま虚しく生を終えることになるでしょう。

「大善も用ゐる事なし。法華經に値はずばなにかせん。大悪もなげく事なかれ。一乗を修行せば提婆が跡をもつぎなん。此等は皆無一不成仏の經文のむなしからざるゆへぞかし」(全集一三一九頁)

どれほど大善根を積んでも、妙法蓮華經に出逢うことが出来なければ詮の無いことです。

あるいは逆に、どれほどの悪業や罪深い人生であっても、縁あつて妙法蓮華經を深く信ずる身となれば、提婆達多のように罪障消滅を遂げて成仏を保証されるのです。したがって何を為したかではなく、何を信じてどう生きたかという事です。

法華經の信仰によって目指すところは、決して表面的な現世安穩ではなくて、我われの一念における現世安穩、後生善処^ニ決定信だと思えます。

生きていけばいいこともあるし悪いこともあるのが当たり前です。順調な時は信心しているつもりでも、調子に乗って慢心を起こし、逆風が吹くとたちまち自信喪失して仏法から退転し

てしまうという、すぐに破れるような薄っぺらい信心では意味がありません。ですから、どういう困難な状況でも、そこを信心決定のための道場ととらえていくことが、修行の要諦になります。また、

「法華經に入りぬれば唯一人の身、一人の心なり。」(同)

といって、海水の例えを出して、幾多の河川から大海へ流れつければ、同じ潮水であるとの譬えなのですが、それではみな命令一下、画一的で没個性的な修行や行動を求めているかといえ、そうではありません。「南部六郎三郎殿御返事」などに、

「法華經の心は、当位即妙・不改本位と申して、罪業を捨てずして仏道を成ずるなり。」(全集一七三頁)

と説かれ、当位即妙・不改本位とは、あるがまま、そのままの姿でまず信心の志を起こすこと、そこに成仏が保証されるのであって、統制された兵隊のような修行ではないのです。

橘 曙覧

たちばなのあけみ

世間の例でも江戸後期の福井藩に、橘 曙覧という貧しい歌人が出ましたが、この人の歌集を読むと、後世に残るような名歌がたくさんあつて、福井藩の藩主がわざわざあばら家を訪ねて教える請うのも分かるような、貧しくとも豊かな心の世界を持っていたのです。

貧乏人の子たくさんで、ボロをまとい、障子なども破れっぱなしだったそうですが、物欲しそうな振る舞いはなく、今でも



語り継がれるくらい、清貧な歌人であったのです。

病人は学会の評価では地獄界だそうで、誰もなりたくもない境涯ですが、病によりて道心を起こし、信心修行と心得ればその病床も寂光土になるというのが、法華経の教えなのです。

そして、その典型的な姿が、大聖人が竜口こそ寂光土といわれた捉え方、お振舞いなのです。普通であれば自分の首を刎ねられてしまふ、泣いても笑つてもこれでお終いだと思つたら、悲惨な

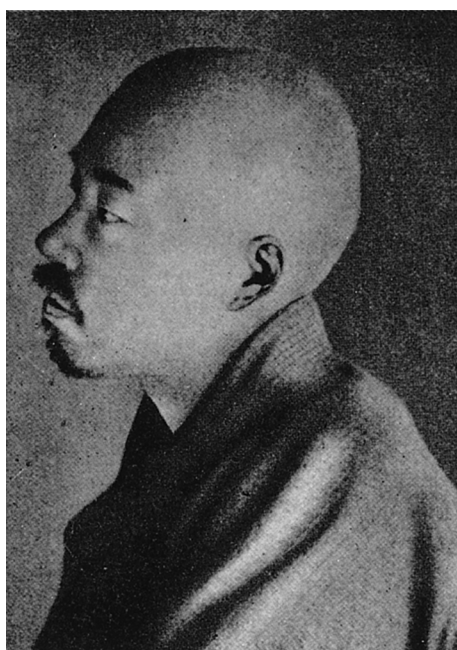
心持ちになつて地獄絵図に見えてきますが、大聖人はそうではなく、もしこの度、命を法華経に奉つて、それによつて成仏が叶うなら、その功德を自分のみならず弟子檀那や父母などあらゆる人々に分かち施そうという捉え方なのです。それは妙法蓮華経への絶対的な信からもたらされる境地でもあります。

《どこでもが、仏道修行の道場》

「四条金吾殿御返事」の中に、

「若し然らば、日蓮が難にあう所ごとに仏土なるべきか。娑婆世界の中には日本国、日本国の中には相模の国、相模の国の中には片瀬、片瀬の中には竜口に、日蓮が命をとどめをく事は、法華経の御故なれば寂光土ともいうべきか。神力品に云く「若於林中 若於園中 若山谷曠野 是中乃至而般涅槃」とは是れか。」(全集一一一三頁)

と、神力品を引かれて仏道修行の場は、実は地獄や餓鬼、修羅界



正岡子規

であろうと、人間界や天界であろうと、どこでも今いるそこが仏道修行の場だという意味を持つているのです。

正岡子規は二十三才で咯血して子規と名乗つたといわれ、二八才に脊椎カリエスのため病床から離れることができなくなつたのですが、それから七年後の臨終まで病床から獅子奮迅の活躍をした文学者なのです。

つまり、子規が死と隣り合わせの病気に冒されていなければ、

そこまで大きな仕事をする事ができなかったかもしれず、病氣ゆえに限られた生を愛おしみ業績を残すことが出来たともいえるのではないのでしょうか。どういふ状況であれ、法華経の行者たる日蓮大聖人の弟子檀那として、一分でもお役に立つようにと志を起こすならば、その時その場が、三世の諸仏が成仏を遂げた道場と同じだということです。

いつでも一念に妙法蓮華経の種を植えて、胸中に白蓮華の花を咲かせることは、ある意味では六根清

浄ということを表しているのでしょうが、煩惱が浄化され、そこからのものごとを正しく見る目も養うことができることを、心に留めておいていただいたら幸いです。

今のコロナ禍も、ただ手をこまねいて時が過ぎるのを待つのではなく、こういう状況も仏道修行の試練と捉えて精進していただければ幸いです。

南無妙法蓮華経

(了)

興風談所の研究成果(十)

興風談所 菅原関道

『興風叢書』〔10〕

『興風叢書』〔10〕は平成十八年十二月一日刊。本号より五回に分けて等覺院日全撰『法華問答正義抄』を翻刻・収録し、毎回大黒喜道が「まえがき」で解説する。中山門流の学僧日全（一二九四～一三四四）は叡山遊学の後、身延久遠寺では日進、中山に戻っては日祐に師事して天台教学・日蓮教学を学んだ。本書全二二巻は正慶から康永まで十数年の歳月を費やして述作され、一巻から一二巻では法華経各品に関する諸要文を蒐集して注釈を加え、一三巻から二二巻では浄土・真言・禅・天台等の各宗の要文を列举して批判・検討し、最終の二二巻では「法華与天台止観勝劣事」「当家観心法体及行相事」と題して天台・日蓮両宗の観心や法体に関する勝劣を論ずる。

ただ残念ながら日全自筆本は一巻も現存せず、中山法華経寺に伝来した明応七年（一四九八）本も、昭和十九年に中山方丈が罹災した際烏有に帰した。そうした中、辛うじて焼失前の昭和六・七十年にかけて斉藤要輪氏が明応本を謄写していたのは幸い

であった。とはいえ、斉藤氏によれば明応本は既に一・四・七・一四・一九の五巻を欠いており、残存分は一七巻であった。

各巻の内容は以下のとおり。第一巻（欠本Ⅱ序品）、第二巻方便品、第三巻譬喻品、第四巻（欠本Ⅱ信解品）、第五巻菓草喻品（授記品・化城喻品は欠）、第六巻五百弟子品・人記品・法師品・宝塔品、第七巻（欠本Ⅱ提婆品・勸持品・安樂行品・涌出品）、第八巻寿命品・分別功德品、第九巻随喜功德品・法師功德品・不輕品・神力品・嘱累品・藥王品・妙音品・観音品、第一〇巻陀羅尼品・嚴王品・勸発品、第一一卷無量義経、第一二巻観普賢経、第一三巻浄土宗釈、第一四巻（欠本）、第一五巻真言宗釈、第一六巻真言宗釈、第一七巻禅宗釈、第一八巻禅宗釈、第一九巻（欠本）、第二〇巻天台宗釈、第二一卷天台宗釈、第二二巻法華与天台止観勝劣事・当家観心法体及行相事。

編集上の都合で本号には「法華問答正義抄三」として第一一卷・第一二巻・第一三巻を翻刻・収録した。内容を簡略に紹介すると、第一一卷は無量義経を主に最澄の『註無量義経』と天台三大部によって注釈する。第一二巻は観普賢経を主に円珍の『仏説観普賢菩薩行法経記』と天台三大部によって注釈する。第一三巻は主に法然の『選択集』を破折する。

『日蓮仏教研究』創刊号に寄稿

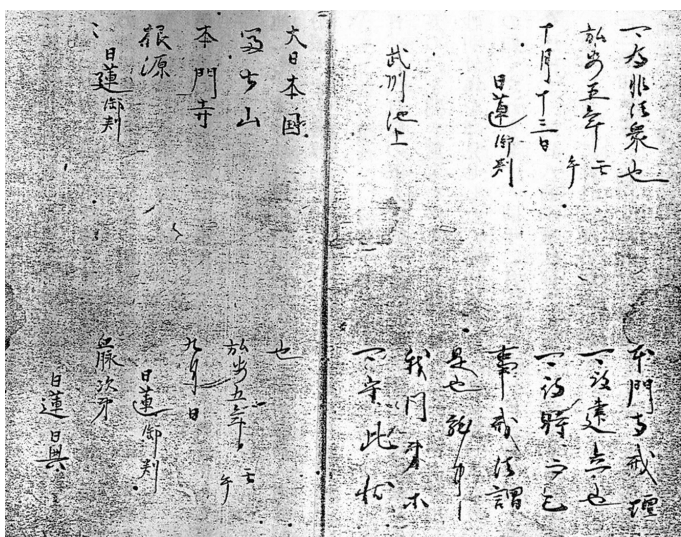
平成十八年四月、東京新宿に常円寺日蓮仏教研究所（所長及川真介・主任都守基一）が開所され、翌年三月十九日に『日蓮仏教研究』創刊号が発刊された。興風談所からは山上弘道の「日蓮聖人の摂受・折伏観——今成元昭氏への批判——」が寄稿された。

『興風』十九号

『興風』十九号は平成十九年十二月一日刊で、山上弘道「富士一跡門徒存知事」について、菅原関道「宗祖の初期における『選択本願念仏集』批判」、菅野憲道「戦国末期の富士門徒」、坂井法暉「日像上人伝承考」、池田令道「『立正観抄』の真偽問題について」、大黒喜道「日興門流における本因妙思想形成に関する覚書(四)」、渡辺信朝「『要決法華知謗法論』に関する覚書」、特別寄稿佐藤博信「岡山・鳥取研修記」という内容である。

山上は先ず先行論文を検討し、次で現存最古の日誉本『富士一跡門徒存知事』の衍字・誤写等を校訂して解説した上で、本書には日興上人でなければ知り得ない記述が随所にあり、史実に決定的に反する記述がないこと等から日興撰と断定する。成立は日順絵図の記述が正和二年であれば正和二年(一二三二)から元亨三年(一二三三)、元

応二年であれば元応二年(一二三〇)から元亨三年の間とし後者を有力視する。日誉本『富士一跡門徒存知事』の写真・翻刻を資料A、校訂版『富士一跡門徒存知事』を資料Bとして付すが、この校訂版は今後の研究の基礎資料となる。日誉本は永正十八年(一五二二)六月四日の筆写で、本奥書の「御本 応永廿九年



大石寺蔵日主筆『雑録』(左上が本門寺額写)

極月廿七日令書写畢 筆者日算六十八才」の文がある。

菅原は文永四年までの宗祖をめぐる浄土教と『選択集』批判に関して、一章では「幼少青年期の修学」「京畿留学」「重時と景信と円智房」「金銅大仏の造立」について述べ、二章では『守護国家論』『災難対治抄』『立正安国論』に引かれる『選択集』の文をピックアップして小考し、

三章では宗祖の『選択集』批判を唱題による下種結縁を中心に考察する。

菅野は戦国末期の富士門徒について、①重須本門寺重宝掠奪事件②武田氏の滅亡と徳川領国化③鉄砲曼荼羅の伝説の再検討④重宝の流転⑤本門寺の三堂本尊⑥妙本寺日要の切紙⑦偽文書の生成⑧再度の乱取りと重須への返還⑨激動の天正期という視点で以下のように述べる。天正九年(一五八一)三月、西山本門寺の日春が武田勝頼の朱印状を掲げて掠奪した重須本門寺の重宝は甲府館の毘沙門堂に抑留され、翌年三月の武田氏滅亡にともない行方不明となるが、

十月に一部が発見され、徳川家臣本多重次はその六十六点の本尊聖教類を新寄進として西山本門寺に納める。しかし重須側が重視した三堂本尊(本門寺大堂本尊)、すなわち国主が帰依した晩に本門寺戒壇の三堂(もしくは大堂)に安置すべき日興上人授与の宗祖本尊は発見されなかったようである。この本尊

には「此本尊日蓮が大事なり(在判)、日興上人に之を授与す」等の裏書があったようで、その写しが諸寺に所蔵されている。

なお日辰は重宝が掠奪される以前に重須の聖教類を拝観書写して、その中に偽文書の本門寺額がある。『富士宗学要集』では右の裏書を本門寺額の一部と勘違いしているが、大石寺日主筆『雑録』中に本門寺額が「大日本国富士山本門寺根源日蓮御判」と筆写されているように裏書とは別物である。西山本門寺に寄進された重宝は重須側が徳川氏に訴え出て、最終的に家康の裁定により重須本門寺へ返還された。

坂井は日蓮門下で最初に上洛天奏を行ったことで知られる肥後房日像(一二六九～一三四二)の伝承を再考する。きっかけとなったのは寺尾英智氏が論文「京都妙顕寺所蔵の日蓮真蹟」に、従来日朗(一二四五～一三二〇)の自筆書状とされてきた元応二年(一二三二)正月三日の通称『玄旨本尊添状』の筆跡と、朗源(一二二六～七八)の筆跡に共通性が見られることから、「朗源の手になるのではないか」と指摘したことにある。つまり朗源は日朗の署名・花押並びに充所^{あつところ}まで模写して創作したのである。

この『玄旨本尊添状』は肥後房充てで、末文に「其辺者建治年中大聖人御意、法華經一部持一色心可^レ為^二天下導師^一、故名^二經一丸^一、急上洛可^レ弘通^二之由^一、玄旨於調^二紙^一直御授与之上者、京都之広宣流布之事、真実^一憑^レ敷存候^一」とあり、そのまま受け取ると、建治元年十二月日の曼荼羅本尊を授与された經一丸は日像の幼名で、宗祖はわずか七歳の經一丸に京都弘通を託して本尊授与したことになる。しかし日像の幼名が經一丸である根拠は『玄旨本尊添状』しかなく、これが仮託書とな

ると、宗祖と日像がどのような師弟関係にあったか殆ど不明となる。坂井は日像の幼名が經一丸であり、宗祖が經一丸に京都弘通を託したことなど「全てを疑問視する必要がある」とし、更に京都妙顕寺の歴代は宗祖―日朗―日像(開山)―妙実―朗源と次第するが、従来日像筆とされてきた『祈祷經之事』『妙法受持之事(受持作法等之事)』『袈裟頂戴事(受持作法等之事)』や、妙実筆とされてきた『十五箇条』もその筆跡から朗源作と考えられるとして、「妙顕寺上代の歴史や教学は、ほぼ朗源の手によって作り上げられたと見做して過言でない」と指摘する。論文の末に「明治以降 日像上人関係論著一覽」を付す。

池田は『立正観抄』の偽撰遺文たることを立証するため、日全撰『法華問答正義抄』等を詳察する。『立正観抄』は当時の天台宗観心主義者の唱えた止観勝法華(止観は法華經に勝れる)説を宗祖が破折する内容となっている。では誰がいつどこで同説を創唱したのか。それは『法華問答正義抄』第二二巻の記述によれば、叡山の千手堂^{ちゅうでう}堅義^{けんぎ}で精義者^{しやうぎしや}を務めた政海(一二三一～九八一)であった。しかし快全から叱責された政海は以後これを公言しなくなる。この点は『正義抄』を閱讀した先学が指摘し、止観勝法華説を破すために引用される文献が『正義抄』と『立正観抄』で共通することから両者に深い関わりがあることも指摘されている。そんな中、それを詳しく検証しつつも、本論文が優れているのは政海が精義者を務めたのが正応年間(一二八八～九三二)以降で、止観勝法華説は宗祖滅後に創唱されたと推定し得た点にあり、『立正観抄』成立の過程を以下のようにスムーズに推測したことにある。止観勝法華説は叡山に流

布せず、政海に学んだ尊海が関東仙波に帰って精力的に流布した。日全は武州諸岡で尊海の弟子筋にあたる仙波学侶から同説を聴いた。元亨（一二三二―一二四一）以前のことである。その後日全は叡山に登り、止観勝法華説の謂れや破折を修学する。元亨三年（一二三三）在山。下山後、日全は身延日進や中山日祐に修学したが、それらの場を通じて日全が叡山にて収集した止観勝法華に関わる資料等が共有され、学侶により研鑽された。その資料を土台にした上で『金綱集』等を参照し、日進周辺の「ある人」もしくは日進によって『立正観抄』が作成される。時期は元亨三年（正中二年（一二二五）頃であろう。

大黒は日興門流には種脱本迹系本因妙思想とは別に、四重興廢系本因妙思想と呼べるものが『本因妙抄』の一部、『五重円記』の全体、日安筆『本尊抄等雑々聞書』に認められるとして考察を加え、「このことは同時に『本因妙抄』成立の背景として、日隆教学とは別に日興門流独自の本因妙へのアプローチがあったと考えても大過ないものと思われる」と述べる。

『要決法華知謗法論』全八巻は安然撰と伝えられるが、渡辺は次の理由により宗祖滅後の日蓮門下が作成したであろうと推定する。すなわち、本書には確かな宗祖遺文『顕謗法抄』『撰時抄』『開目抄』『実相寺御書』『四信五品抄』等のみならず、偽撰遺文『今此三界合文』『如説修行抄』『釈迦一代五時経図』等の文の引用や転用を思わせる文章があり、また安然の時代にふさわしくない、宗祖が常用した用語も見られる。渡辺は『要決法華論』に語られた法華経第一主義や痛烈な八宗批判（とりわけ真言・念仏宗・禅宗への鋭い批判）は、日蓮門下から見

た天台宗の理想像と言えなくもないであろう。それを天台宗の中で多少とも弘法・真言に批判的であったとされる、安然に仮託して思いの丈を語らせた、それが『要決法華論』なのである」と結論して、『要決法華論』と『法華肝要略注秀句集』は『法華本門宗要抄』を作成した日蓮門下によって、殆ど同時に前者は安然、後者は最澄に仮託して偽撰されたと推測する。

千葉大学教授の佐藤博信氏は平成十九年六月二十九日の興風談所定例勉強会で、「上総藻原寺の成立と展開」と題して発表され、翌日鳥取県へ向かわれた。その目的の一つは富木常忍の出身地である富木郷調査にあった。「岡山・鳥取研修記―興風談所・富木氏発祥の地を訪ねて―」はその研修記であり、かつて鳥取市国府町に存在した因幡富木郷と富木常忍について、富木郷周辺の地図を示しながら分かりやすく解説されている。

『興風叢書』〔11〕

『興風叢書』（11）は平成十九年十二月一日刊で、「法華問答正義抄二」として第六巻五百弟子品・人記品・法師品・見宝塔品・第八巻寿量品・分別功德品・第九巻随喜功德品・法師功德品・不輕品・神力品・囑累品・藥王品・妙音品・觀音品・第十巻陀羅尼品・嚴王品・勸發品・翻刻・収録した（第七巻は欠本）。

「まえがき」に紹介されているように、第六巻見宝塔品・四、付属事」では宗祖の上行菩薩再誕・垂迹が強調され、京都日蓮門下の中にそれを否定する意見があると批判している（八八・八九頁）。第八巻寿量品・四、本迹勝劣事」には方便品読不に関する日向天目の問答が記してある（一四一頁）。

【採過拾新録】

中村仲蔵と山中平九郎

伝説の歌舞伎役者「中村仲蔵」は本誌令和二年四月号で蓮華寺過去帳記載とともに紹介したが、「秀鶴の型」、「仲蔵振り」など、その所作には現代まで受けつがれるものも多く、落語にまでなっている異色の名優である。

仲蔵は孤児から養父母に育てられて、門閥外から一代で大名跡になるまで出世しただけにエピソードには事欠かない。その自伝随筆も、近世には珍しく幼少期から始まる心理描写などを含み、その演技同様に高く評価されている。

ここでは、熱心だった本宗信仰の一面を、その自伝から拾って紹介する。百日題目修行の記録などもあり、幾多の恩人に報恩の回向を怠らなかつたようだ。ただ惜しむらくは人気稼業のせいもあってか、仲蔵には謗法厳戒の念がなく、およそ有名な神社仏閣にはどこでも参詣する清濁混淆の信心だったことである。また三代目も千両役者と評判をとった名優だが、初代同様の信仰を受けついでことは、その著『手前味噌』に記されている。

山中平九郎は中村仲蔵より二十年以前の役者。「江戸公家悪の

開山”「実悪（敵役）の開山」と称され、演劇界に大きな影響を与えた。享保九年五月十五日元祖山中平九郎没。冷山院壽仙。舞踏の水木流開祖ともいわれ、名跡は三代まで続いた。没後下谷の常在寺に葬られたが、その墓地は後に移転しており、現在不明となっている。なお下谷常在寺と谷中常在寺は混同される事が多く、注意が必要。ここでは、二代目の打敷寄進と舞踊の水木流との関係の記事を紹介する。（なお、本稿は原文に送り仮名、ルビ等を適宜加えた）

●『秀鶴随筆』抜萃（新燕石十種五卷より）

「○三島鹿子、これは十六番の内にて御座候。此の度駿河国にて、富士山御拝奉りて、三島明神参詣仕り、大石寺日純上人様より戴き申し上げ候末広、日出の富士山、墨絵の松はよし原、旭に鳥のむらがりて舞い遊ぶありさまは、田舎なれども三島明神、江戸紫かのこよい／＼総鹿子、駿河国より江戸の都、天下一同に太平樂を駿河舞、右之三島鹿子合体なして、駿河舞と名付申し候て、そこ元の舞と定め申し候也、

（中略）

○庭の柘榴の木あり、枯木のやうに存す。御題目唱へ申し候て、水、日々かけ申し候処、芽出し申し候て花付、今日一輪咲き申し候、慶子、鬼子母神信心にて御座候、故に庭に御座候也、

春の音の柘榴の花やほう法花経 母のめぐみにあふや 一りん

○此の度大坂かしく寺にて、塚原祖師様開帳御座候に付、おちへ様参詣に人なく、久兵衛を貸遣し申し候、久兵衛、日出の上に舞鶴、下稲二抱画の扇、拾ひ帰り申し候なり、鶴の眼ざしにて一し

ほ祝ひ、私申し請け候て、

秋の田を祝ふ日の出の舞鶴や目出度かしく栄へ末広

(中略)

我は実の父母しらず、幼少よりも、子ならぬ我を子と成て、法式糾しく御教下され候、伝九郎一弟子は孫成とて、段々と御家の儀迄御ゆるし下され候。三番叟本式、幼少よりも御鼻負強く御取立下され候御方様、皆他人にて、その道には有難き御方々様なり、月は替れども命日は同日なり、誠に深き御縁を一偏に、

咄聞く元は妙法蓮華經 他生の縁を結ぶ蓮糸

大小の舞は父母師の名取草 他国御鼻負実の部や親

南無妙法蓮華 末広の瓜に暑も忘れけり

(中略)

○(天明八年) 七月十三日、北野村蓮花寺に参詣申し仕り候、去る極月十七日大坂着仕り、夫より折もなく今日参詣申し仕り候。

御本堂御普請にて、御座敷に御本尊祖師様を飾り御座候也、御床に三方様の御掛物を懸け御座候、御参詣申し上げ候て、御懸物拜み申し上げ候處、御本尊を遊ばされ候は、富士大石寺三十六世にて、日堅上人様にて御座候、右御上人様は私十六年前に大石寺に参詣仕り御目見え申し上げ候當山の御上人様にて候也、私道中にて乱心仕り、御本山にて御介抱に預り、一山の御祈禱遊ばされ下され候、有難き御方様也、大坂にて拝し奉り申し上げ候事、誠に大石寺に参詣申し仕り候心に相成り、有難く存じ奉り候、

○右之御本尊様儀は、蓮花寺様本山参詣成りがたくして、御願い遊ばされ、其の志を哀れに思し召して、御本山の御本尊に少しもたがわず遊ばされ下され候との咄しなり、

○右御上人様、未の年に江戸へ御下り遊ばされ候時、御礼の御目見え申し上げ候、有難き御縁に預り申し上げ候、御見物之儀御願い申し上げ候處、是迄右の御礼なく、依つて内々にて御入り遊ばされ候に付き、私方へ御立寄り遊ばされ、仏前にて御経遊ばされ御祈禱御座候、祖師様も新たに作り奉り御開眼遊ばされ、厨子に入れ御本尊も戴き申し上げ候、未の三月十五日御見物、私葱賣淨瑠璃の初日也、右御縁と相成り、三十七世日瑠上人様御見物に御入り遊ばされ候、三十八世日泰上人様御見物に御入り遊ばされ候、三十九世當日純上人様、此度江戸へ御下りにて、十代世繼寿ぎ申し仕り候、中村座志賀山一流三番叟申し仕り候に付、有難き御本尊二通戴き申し上げ候て、閏十月六日御見物に御入り遊ばされ、御持ちの末廣に御秀句遊ばされて戴き申し上げ候。其の日寿ぎの舞い舞台にて遣ひ申し上げ候、有難き御儀、蓮花寺隠居様に御咄申し上げ候て、毎月朔日御祈禱御願申し上げ候、御本尊は夢の祖師とて、左は日興上人似写のよし、右三尊なり、不思議の御縁にて有難く存じ奉り候、

(中略)

○十六日は法界祭候へば、役仕舞、北野村蓮花寺に参詣仕り、代々の御祈禱御願申し上げ候、三番叟、大小の舞、土人形を持参仕り、両親に定申し候事咄し申し上げ候て、今は五月廿一日父、十月二日母と分け申し候事御咄申し上げ候、十三日飯団餅、今日十六日毎々月申し仕り候事、御咄申し上げ候、かよふに賑々敷き何れ盆のおどり、太平のしるしとぞんじ候、

世の中は踊おどり盆踊 太平踊を見よや末

(中略)

○夏書、四月八日より晦日迄四百三十七編、

五月朔日より晦日迄、千三百二十九編、

六月朔日より晦日迄、二千百七十三編、

七月朔日より十八日迄、千八百三十二編、

四月八日より七月十八日、百日御題目、五千七百七十一編、無懈

怠首尾能く仕り申し候、

百日の功も雀のおどり振

世は住よしと千代も八千代も

(中略)

○八月朔日、北野村蓮花寺御祈

禱、月々御願申し上げ候、」

●堺屋中村仲蔵秀鶴漫筆

『月雪花寝物語』抜萃

(日本人の自伝第10巻より)

「私〔儀〕改名〔を〕御願

申し上げ候事、この度の儀にて

は御座無く候。十一カ年以前未

の年(安永四年一七七五年)、養

父中山小十郎二十三回忌に相当り候。右に依って旦那様(二世中

村伝九郎。のちの中村座座元八世中村勘三郎)へ改名の儀御願

申し上げ候ところ、御得心遊ばされ、六月中旬改名仰せ付けられ

候に付き、則ち菩提所本寺富士大石寺より改名の本□^{尊カ}いただき申

し候て、旦那様へ御覧に入れ候ところ、奇特者と御褒美御座候。

いよいよ顔見世よりは中山小十郎に相成り候よう仰せ付けられ、
有り難く存じ奉り候。(小十郎への改名は一旦中止、

(中略)

一、天明五乙巳(一七八五年)十月十二日、改名に付き、燭台三
本、中村・杵屋・志賀山・中山代々をあらわし、富士大石寺へ奉
納申し上げ、御悦び成され御受け取りに代々狂歌をあらわし候。

続やつて 名高き富士の 末
広く 所作ぞ駿河の 舞のほ
まれを 富士三十九世 日純

(判)

右の通り戴き申し候。〃こ

の義は成り難き義にて候えど
も、家々の世続き申し候事下

され候」との事なり。有り難

き家の宝なり。この度三十三

年にて養父名に改め、六代中

山小十郎改名の祝賀、おびた

だしく参り申し候。有り難き

御義なり。これまでの間にめ

ずらしき事かぞえがたし。見

聞き申す事、前後かまわず書きたて申し候なり。(中略)

この時四年前に深川六間堀に罷り在り候て、所の若者ども心易
く仕り、方々へつれ立ち参り申し候ところに、森下町の道具屋に
てさまざま道具御座候なり。ある時此蔵同道にて、弥勒寺様へか
かり通り申し候ところに、日親上人御旗曼陀羅の御肩衣一幅御座



初代中村仲蔵の斧定九郎(勝川春章画)

候。小幅にて御座候。誠に御縁に御座候や、私を誰やら呼ぶように聞え申し候に付き、ふり返り申し候と、右の曼陀羅目をさえぎり申し候。何心もなく立ち帰り、また日を過ぎて通り申し候ところ、また名を呼び申し候ように聞え、三度に及び申し候。やはり肩衣目にとまり申し候。立ち寄り申し候えば「五百文」と申し候。よつて三百文に付き申し候ところに、早速まけ申し候に付き、

買い求め申し候て拝み申し上げ、承り候えば、日親上人御旗曼陀羅御題目にて、丸く御書き遊ばされ候。珍しき御品と存じ、殊に旗曼陀羅、向う敵無しと申し候。日の親〔に〕御座候えば有り難き御事に仕り申し候。悪しき病御座候時、借し遣わし申し候に妙に平愈仕り申し候。貸し申し候事も忘れ申し候に、いつとなく御帰り成され候なり。その後久しく見え申さず候に、いつの間にやら仲八方へ御帰り成され候て、そのわけ仲八も存じ申さず候なり。誠にふしぎの御曼陀羅なり。大事に仕り罷り在り候。(以下省略)

九月十一日、柳嶋へ参詣仕り申し候なり。大勢にて候えば、所の米屋にて十一屋と申し候ところに茶舟候。この倅与兵衛と申し候。友だちにて候えば茶舟をかし、その身舟頭仕り、岸・三之助・弥八・私その外上下六人にて、十一日残らず参り申し候。大嵐にて柳嶋より柏屋参り、ようよう舟にて帰り申し候なり。

同三の巻 天明六丙午年 仲蔵、元文元年丙辰に生れ、天明六、五十一歳になる。

二十、天明六年正月、伝二郎母おせい、今日雑司谷鬼子母神様二日初参りみやげに三番叟ベカコ風(舌出し三番叟の風)買い参り申し候なり。右は板木にて昔よりも御座候。江戸一流にて志賀山振りの元にて御座候。咄し仕り、今日両方とも一度に揃い申し候

事、振りの家にて候えば一入有り難く存じ奉り候。当年、六日節分にて御座候。」

●御宝蔵収蔵・打敷裏書

明和第二乙酉年 大石精舎第三十四世 日真
奉捧祖師御生骨御宝前 打敷一枚 奉納主 武州江戸高砂町住人
六月十五日御虫払御 山中平九郎 敬白

●『近世日本舞踊史』(石井國之 昭和十二年刊)

水木流の開祖は水木辰之助と山中平九郎が開祖となっている。それは「辰之助の弟子であつた水木竹十郎が、後年平九郎の女婿となつて山中竹十郎と改めた事である。此竹十郎は實惡の餘流ともいふべき色惡の創始者」で「享保六年九月十七日四十八歳で歿したが、其寺は下谷の常在寺(現今池袋に移住)で、平九郎も歌仙も皆此寺に葬られてゐる點から察しても一族である事が判る。

さてさうなると、辰之助と平九郎の二人を以て水木流の祖とするのは、此竹十郎によつて其關係が結ばれたとする一理由となり、從つて歌仙が或は竹十郎の子ではないかとの考へも浮んで来る。それから、延享年間俳優で振付を兼ねた水木九十郎も同じ常在寺に葬られて居るのを見ると、此人も歌仙同様竹十郎と深い關係が有るやうに思はれる。山中平九郎の二代は其弟子によつて継がれ、水木辰之助の名は水木竹之助(初染之助)の襲名する所となつた」

【山行記】

白峰三山縦走記

— 七月二十二日～二十四日（二泊三日） —

大阪地区 森 秀之



北岳山頂にて、筆者

ルプスを代表する縦走路として人気のコースです。

今回の縦走コースです。

【一日目】

広河原……白根御池小屋……すな滑り
……標高二六三〇付近……小太郎尾根
分岐……北岳肩ノ小屋（テント場）

【二日目】

北岳肩ノ小屋……北岳……北岳山荘……
中白峰……間ノ岳……農鳥小屋……西農
鳥岳……農鳥小屋

【三日目】

農鳥小屋……西農鳥岳……農鳥岳……大
門沢下降点……枯れ沢渡渉地点……大門
沢小屋……吊橋（森山橋）……奈良田第
一発電所（農鳥岳登山口）……奈良田

まずは、この投稿についてプライバシー
トな夫婦事ですが、家内との約束（一人

で登る事、以前の山友とは繋がらない等）を破りました。今回は家内には嘘をついて、以前の山友の女性二人と同行で、テント泊での行動になりました。私がその嘘をついての行動を大したことがないと思っているのが、余計に家内の心に傷をつけています。『恵日』投稿には嘘はあつてはならないので、私が起こした家内への約束反故、裏切り（嘘つき）行為の心中を察すると、何とも心苦しい気持ちですが、私事ですがあえて述べます。

当初、立山三山から剱岳の山行予定にしましたが、天候が今ひとつであったので、天気が大丈夫そうなのは南アルプス方面があり、急遽山行ルートを替えました。私と同じようにルートを替えた方が、ほとんど山行で話をした人で、思考回路が同じなんだな、と面白く思いました。

さて、七月二十一日、夕方六時頃出発し、梅田で同行者を乗せて、一路、新名神（新東名）中部縦貫道へ。増穂で降りて身延方面から奈良田駐車場へ午前二時頃駐車しました。無料駐車ではありませんが、満車状態で路駐でなんとか駐車できました。しばし仮眠し、五時三十分のバスで

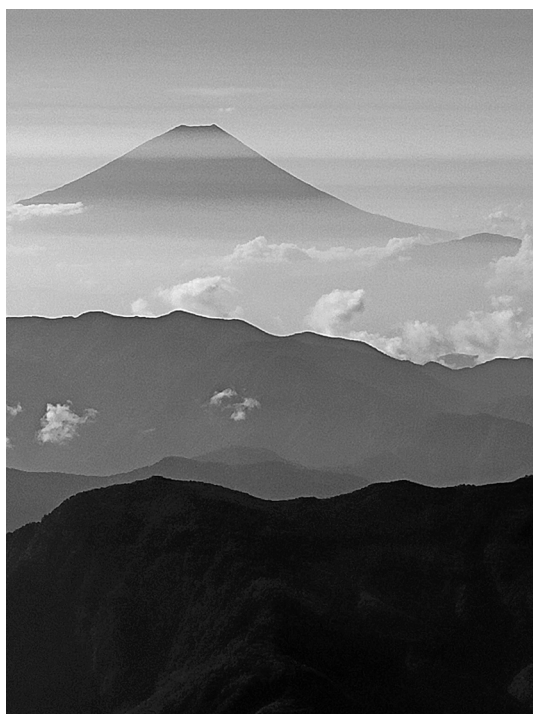
今回は白峰三山、いわゆる南アルプス北部から中部にかけて続く北岳、間ノ岳、農鳥岳の総称になります。間ノ岳に登るまでに中白根岳、農鳥岳の手前には西農鳥岳とすべて三千メートルを超える高峰で五山を縦走します。中でも北岳（三一九三・二メートル）は日本二位、間ノ岳（三一九・五メートル）は、日本三位という高さを誇ります。これらをすべて歩ききる白峰三山の縦走コースは、南ア

広河原（北岳登山口）へ向かいました。天候にも恵まれ連休初日でもあり、バスも満席で大勢の人で賑わっていました。

広河原へ到着し、準備して早速歩を進めると樹林帯に突入します。少し歩きだしたところから、少しずつ斜度も増していきます。数珠つなぎで列をなして、大きなリュックを背負って縦走を指している人が多く、その後をついてゆつくりペースで続いて歩きます。気がつくと当初のルート、二股への分岐を通りすぎてしまい、そのまま続いて登ることにしました。すぐに背中がじつとりと濡れ、一旦休憩し上着を脱いで歩くこと約二時間、ダケカンバの木が目立ちはじめるとき、白根御池小屋が見えました。ここには、小屋の水道には「美味い南アルプスの天然水をどうぞ」の文字があり、おいしい清水をゴクゴクと飲んで大休憩をとりました。

同行者から「ここから等高線が狭い。急登ですね」との声がかかり、「ギアを一段さげてもう少しゆつくり歩くよ。」と声を掛け、その先には草すべりと呼ば

れる緑の斜面が見えます。そこから寡黙に九十九折りをひたすら登り、二六〇〇メートル付近の小太郎尾根分岐に到着し、そこからは景色を楽しみながら肩の小屋のテント場へ到着。登る途中は同じペースで歩くグループの人達が三組あり（二



北岳山頂から富士山を望む

取れず、テント泊となり、早速テントを幕営し、小屋前で富士山や鳳凰三山、甲斐駒ヶ岳を眺めながらラーメンや、パスタで夕食を済ませ、明日に備え二十時頃に就寝し、四時に起床しました。

二日目はテントを畳んで、まずは北岳（日本第二位）にてご来光をと歩を進め、山頂へ到着。天気は最高で三六〇度を一望でき、富士山もばっちり見られてテンションもマックス。北岳山荘での情報では、午後から雷雨になるとの予報で、何とか大門沢小屋を目指して、素晴らしい景色の稜線歩きをたのしみながらも、小刻みなアップダウンと荷物の重さが、足腰・肩に負担になっていきます。

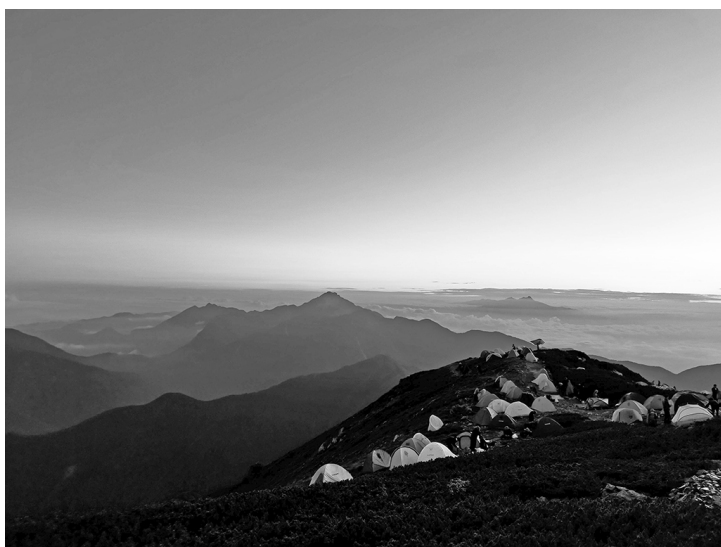
組は関西、一組は関東方面）休憩も同じタイミングで、テント場についた時には同志のような一体感で到着を祝いました。その後も、二日間最終地点まで同じペースで続いていくのも、中々趣のあった山行でした。

急な登山計画変更で、山小屋の予約も

（位）に到着したところには、少しガスってきて、景色もあまり期待できなくなってきました。そのまま農鳥小屋まで進み、しばし昼食休憩し、大門沢へ進めるためにすぐに出発し、そこから続くグラダラ登りを西農鳥岳まで来たときに雷が響きわたり、どうするか相談し一旦農鳥小屋

まで引き返すことにしました。そうすると雨も降り出し、小屋に着く頃にはびしょ濡れ状態になってました。ここでテントを幕営する前に、小屋に泊めてもらえるか確認する事にしました。この小屋の主人は名物親父らしく、事情を説明し小屋に泊めて欲しいとお願いしたところ、意味不明な事を話していましたが、何とか泊めてもらうことができました。私たちが泊まる二〇畳ぐらいの部屋は、私たちが一番だったので、好きな場所が確保が出来、早速着替えて明日の準備が簡単にできたことはラッキーでした。その後も同じような山行者が続き、結局二十人以上が一緒に寝泊まりする状況でした。「大変密な状態や」と話しながら過ごすことになりました。あげくの果てには予約している五人組の方の到着が遅くなっている、そのグループも同じ部屋で宿泊させるいい加減な山小屋主人でした。予約して遅くなった人たちに「来るのが遅い云云」と説教する始末ですから、何とも気の毒な予約者でした。そんな感じの主人ですから違う部屋の人たちと口論になっていました。ただ南アルプスの天然

水が沸きだしていてそれを汲み上げるのに二十分程下るのですが、折角なので雨がやんだあとに汲み上げに行つて、清水は本当においしかったのと、圧巻だった



農鳥岳の山頂にはテント村ができていた

のはトイレが崖の上にあつたことで、後に体重を預けると、そのまま落ちてしまいました。いそうなトイレでビックリでした。

三日目は、朝四時出発で、昨日登った西農鳥岳く農鳥岳へ向かう途中の稜線越

しにご来光が見られ、またもやひときわ大きくなった富士山を拝むことが出来ました。そういう意味ではこの景色が見られたのは昨日が雷雨となり農鳥小屋で宿泊したことで良かったなと思いました。そして白峰三山最後の農鳥岳に登頂し、そこからは大門沢への分岐までは、また稜線ををどんどん下って行きます。

大門沢分岐からは急な下りです。大門沢小屋まで約三時間近く掛かります。慎重に滑らないように下って行きます。結構先行している人たちが滑ってこけているのが、声の響きでよく伝わってくるので、気を引き締めながら下りました。

当初、二泊目の予定の大門沢小屋に着し、炭酸飲料で休憩し、後は一気に三時間ほど、奈良田の駐車場までこれでもかという下りを、さらに慎重に歩いて無事に到着しました。

行程距離は二十八キロメートルほどで、大門沢小屋への下りの道以外は、整備された歩きやすい道でなんといつても北岳からは富士山がどんどん大きくなり、その長い両線の景色を楽しみながら歩けるのは最高でした。

今年の大河ドラマ「青天を衝く」の主人公として、また、三年後に刷新の新紙幣の一万円札の顔として、今注目されている著者は、約五百社もの企業を立ち上げ、五百以上の社会事業にも携わり、「実業界の父」と称されている。

著者の思想や信念の根幹を記したとされる本書は、一九一六年（大正五年）に初版。それより今日に至るまで版を重ね続け、今なお様々な分野の人たちに影響を与え続けている。

価値観が大いに変化してきた激流の時代にあつて、今に読み次がれる秘訣はなんなのだろうか。その答えを目次に目を通すだけで見つけ出すことができる。

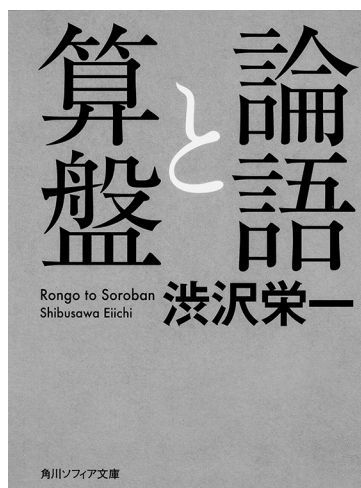
今を生きるために何が必要なのか、その処方箋がずらりと揃っている。

たとえば、「得意時代と失意時代」との項目に目を向けると、そこには、

「およそ人の禍は多くは得意時代に萌（も）すもので、得意の時は誰しも調子に乗るといふ傾向があるから、禍害はこの欠陥に喰い入るのである。されば人の世に処するにはこの点に注意し、得意時代だからとて気をゆるさず、失意の



松田 銘道



渋沢栄一 著

『論語と算盤』

角川文庫
定価 八三六円

時だからとて落胆せず、情操をもって道理を踏み通すように、心掛けて出ることが肝要である。」

との一文に出会う。

誰もが得意な時代には調子に乗ってしまふだろうし、失意の時代には落胆してしまふに違いない。しかし、著者は「情操」と「道理」の心がけを説く。

また、「常識とは如何なるもか」との項目に注目すると、そこには、

「余は次のごとく解釈する。すなわち、物事に対して奇矯に馳せず、頑固に陥らず、是非善悪を見分け、利害損得を判断し、言動挙動がすべて理に適うものがそれである。」

との著者の想いに引かれる。

ここには、実行困難と思える言葉がずらりと並んでいる。それでも「余は次のごとく解釈する」と、自ら実行しているという裏付けがあるから、百年以上前の言葉でも、時代を超えて私たちの心に響いてくる。このように、本書には今を生きるための智慧がぎっしり詰まっている。今に読み継がれているのは、著者の生き方が万人に通じているからだろう。



恵日だより

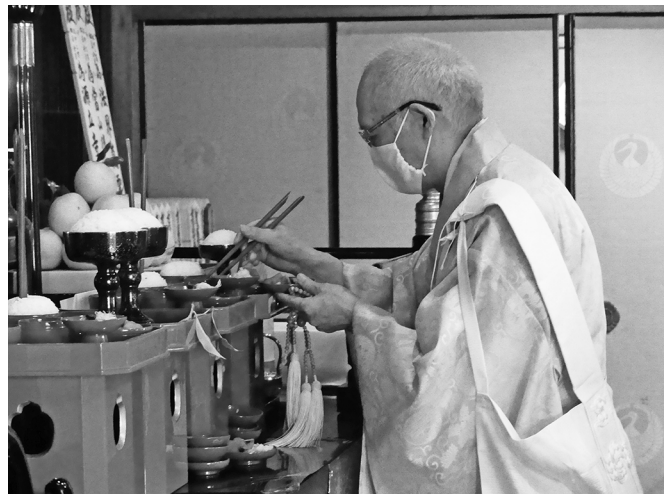
孟蘭盆会法要

八月十三日(金)～十五日(日)

故精霊に想いを込めてお焼香(孟蘭盆会)

八月に入っても、コロナ禍は収まるどころか、連日新規感染者数を更新するなど、勢いは一向に収まる気配がないことから、例年各家庭にお参りしていたお盆の棚経は、昨年に続き、初盆のお宅を除き全面中止とさせていただきます。

また、十五日に奉修していた孟蘭盆会も、三つの密を回避するため、昨年同様地区ごとに奉修することとなり、十三日(兵庫)・十四日(北摂・槻木)・十五日(豊能・大阪)の三箇日に分けて奉修されました。このうち十三日の兵庫地区の孟蘭盆会では、各地に



献膳をされるご住職(孟蘭盆会)

被害が出る全国的な大雨が続く中、午後一時、出仕鈴が打ち鳴らされる中ご住職が出仕され、ご住職の導師により献膳、読経と如法に進められ、寿量品に入ってご住職のご焼香が行われると、引き続き参詣者が順に焼香台へと進み、全員がお焼香をし、ご住職により懇ろにご廻向がなされ、お題目三唱の後、ご住職より挨拶があり、法要は終了しました。

同様に、十四・十五の各日も、午前と

午後に分けて、各地区ごとに法要が奉修されました。

案内のお知らせ

*各種行事の参詣について

各種行事は、行事予定表の通り行いますが、密集・密接を避けるため、法要の地区別日程での奉修、座席数の制限などをします。

参詣の際には、マスク着用や手洗い・手指の消毒等、感染予防に努めて下さい。
※源立寺本堂の玄関・トイレ前等にアルコール消毒液が置いてありますので、参詣の際はご利用下さい。

*御難会のご案内

九月十二日(日)午後一時より、御講にあわせて、源立寺本堂において御難会が奉修されます。御難会は、「大難四ヶ度」といわれる数々の難に値われた大聖人の御一代においても、頸の座という身命に及ぶ最大の難である、文永八年九月十二日に起こった竜口法難を期して、宗祖日蓮大聖人が発迹顕本されたことを、

ご報恩申し上げる法要です。

なお、御難会の参詣(十二日・十三日)は、準備の都合がありますので、参詣を希望される方は、予めお申し込み下さい。

*秋季彼岸会のご案内

九月二十一日(火)～二十三日(木)

の三日間、午前十時半と午後一時に、源立寺本堂において地区ごとに秋季彼岸会が奉修されます。

お彼岸の御塔婆の申し込みは、なるべく早めにお願います。当日のお申し込みの場合は、法要に間に合わない場合がありますので、ご注意願います。

【長月詠草】

〔和風〕

夫の出す クイズ解け得ず 子も吾も
無念に残る 除夜となりぬ
ただいまと 足どり軽く 帰り寄る
新聞配達 終えたる吾子は

【恵日俳壇】

〔農婦〕

早三日獲物きたらず袋蜘蛛
新米のどさり積まれて村を出つ

〔森 秀之〕

北岳が峰をたばねる夏の花
雲海に北岳の峰シルエツト
稜線に夏の富士山見えかくれ





九月の行事



一日(水) 午後二時 お経日

五日(日) 午前九時 講中勤行会・幹事会

十二日(日) 午後一時 お講・御難会・役員会

十三日(月) 午後一時 お講

二十一(火)～二十三(木) 地区別秋季彼岸会
(下記地区割参照)

二十七日(日) 午後二時 法華経講義

※御難会の参詣は、電話等で予約をして下さい。

※十月号の継命・恵日発送(九月末)は、

『豊能』地区が担当です。

十一月号の継命・恵日発送(十月末)は

『兵庫』地区が担当です。

秋季彼岸会地区別奉修日のご案内

※秋季彼岸会は、左のように地区別に奉修いたします。地区の奉修日に合わせてご参詣ください。(予約の必要はありません)

21日(火) 午後一時 北摂地区

22日(水) 午前十時半 槻木地区

同 午後一時 豊能地区

23日(木) 午前十時半 大阪地区

同 午後一時 兵庫地区

源立寺

恵日

令和三年九月号 通巻三二〇号
令和三年九月一日発行

編集兼

菅野憲道

発行人

発行

恵日編集室

〒563-0057 池田市槻木町一〇 源立寺内

TEL (〇七二) 七五一一三三五

E-Mail kanno@wombat.zaq.ne.jp

購読料(含送料) 年間二〇〇〇円

加入者名 恵日編集室会計

〒振替 口座番号 013801212649